



観光まちづくり **最前線**  
No.5 地域を歩くレポート

江戸中期にブレイクする成田詣の今昔  
～観光プロモーション・

**五感の観光まちづくり・国際観光が学べる町・成田山新勝寺**

帝京大学 経済学部 観光経営学科 大下ゼミ

成田山といえば関東では初詣と節分の豆まきが有名な観光地。調べてみると1000年の歴史がありました。また夏になると話題となる「土用の丑の日には鰻」というキャッチ～平賀源内の発案が定説となっています～の主役の「鰻」もまた成田の名物です。今回は平成25年度のゼミで研究対象とした千葉県成田山の新勝寺と門前町についてレポートします。

■成田詣の起こり～歌舞伎の「成田屋」はいままでいう地域プロモーション

千葉県観光入込調査によると平成24年の成田山新勝寺の観光入込数は998万人であり、東京ディズニーリゾートの2750万人に次ぐ県内第二位の入込客数を記録しています。「成田のお不動さま」と親しまれている新勝寺の起源は平安時代の平将門の乱に遡るとされています。現在につながる飛躍的な興隆・観光地となった要因は、佐倉藩主の祈願寺となったことでの江戸での布教活動～いわゆる出開帳(10回記録されています)、江戸中期以降の旅ブーム、さらには初代市川團十郎との関わりによるところで大きかったと見られます。

初代市川團十郎は新勝寺の近隣の出身でした。子宝に恵まれなかった初代團十郎は成田山の当時の本堂である薬師堂で一心に子授けを祈願します。その結果待望の長男を授かります。お不動さまへの祈願が成就し長男を得たことに感謝をあらわした親子共演の舞台が大ヒット。それ以降、市川家は「成田屋」という屋号を使うようになりました。

一方、江戸中期に人口増加から安定期に差し掛かる頃～ちょうど八代将軍吉宗の頃には、都市近郊の行楽地が誕生するとともに、江戸近郊の成田山新勝寺は、江戸から3泊4日の格好の観光地となり、文化年間(1804～18)には、成田詣が激増してきます。

出開帳による成田山新勝寺の知名度向上効果、そして歌舞伎の演席での「成田屋」の掛け声は現在での地域プロモーション活動であり、観光地への誘客活動の基本であるマーケットでのプロモーション活動の原型と見てとれます。



初代團十郎似姿

[近世の成田山開帳年表]

回	西暦	年号	開帳種別	場所
1	1701年	元禄14年	居開帳	※自寺
2	1703年	元禄16年	出開帳	深川・永代寺八幡宮社地(1)
3	1721年	享保6年	巡行開帳	下総国 他
4	1726年	享保11年	巡行開帳	常陸・下野国 他
5	1733年	享保18年	出開帳	深川・永代寺八幡宮社地(2)
6	1751年	宝暦元年	巡行開帳	江戸府内 他
7	1762年	宝暦12年	出開帳	深川・永代寺八幡宮社地(3)
8	1764年	明和元年	巡行開帳	常陸・武蔵国 他
9	1789年	寛政元年	出開帳	深川・永代寺八幡宮社地(4)
10	1806年	文化3年	出開帳	深川・永代寺八幡宮社地(5)
11	1807年	文化4年	居開帳	※自寺
12	1809年	文化6年	出開帳	匝瑳郡八日市場見徳寺
13	1814年	文化11年	出開帳	深川・永代寺八幡宮社地(6)
14	1815年	文化12年	居開帳	※自寺
15	1821年	文政4年	出開帳	深川・永代寺八幡宮社地(7)
16	1822年	文政5年	居開帳	※自寺
17	1833年	天保4年	出開帳	深川・永代寺八幡宮社地(8)
18	1835年	天保6年	居開帳	※自寺
19	1842年	天保13年	出開帳	深川・永代寺八幡宮社地(9)
20	1844年	天保15年	居開帳	※自寺
21	1855年	安政2年	居開帳	※自寺
22	1856年	安政3年	出開帳	深川・永代寺八幡宮社地(10)
23	1857年	安政4年	居開帳	※自寺

※資料:小倉博氏講座資料「成田山と成田詣で」

■川魚料理の横綱「鰻」と国際的なお店が混在する成田山参道

JR成田駅から新勝寺までは約800m。門前といえば一直線で平坦な参道のイメージがあるが、成田山の門前は緩やかな下り坂で左右に湾曲・蛇行する変化のある参道です。山道には、十二支の石のモニュメントがあり、自分達や先生の干支のモニュメントを探しながら散策を楽しみました。新勝寺に近づくと木造の三階建の風情ある料理屋さん軒を連ねています。印旛沼や利根川の近さを感じさせる「鰻料理」、店先の匂いからもわかります。70店舗位はあるというインターネット情報を先生に見せても、昨今の鰻の高騰の影響からか軽く話題を変えられてし



成田名所図会(第5巻)に描かれている  
成田山・新勝寺の参道の風景



園十郎が寄進したとされる額堂  
(1861(文久元)年に建立された  
重要文化財)。



成田山・新勝寺の入口・総門から、  
私たちの新勝寺探訪が始まりました。

まいりました。店先での蒲焼の匂い「五感を活かした観光地(味覚は次回に)」の極意を成田山道で脳裏に刻みました。また成田といえば国際空港。参道の入口近く、あるいは横丁に入ると国際的なレストランやバーも見られます。我々はBACKPACKER ☆ FUJIに投宿、素泊まり2700円。リビングには世界地図が貼られており、投宿したお客さまの出身国にピンが。また何かか、出身国のお札やコインが貼られていました。当日も外国からのお客さまが滞在されており、挨拶を通じて国際交流を楽しめる、別の意味の楽しみ方も成田ならではの滞在の楽しみでした。



緩やかな蛇行とアップダウンのある参道は、  
まち歩きにリズムを与えています。



今度は「鰻を食べた〜い!!!」。もう一度訪れたい  
必然性を感じた次第です。



外国人観光客の立ち寄りそうなお店も・・・  
新旧混在した夜の風景!!



BACKPACKER ☆ FUJI の  
リビングは国際的。訪日  
された外国人観光客の母  
国の紙幣が壁にピンで留  
められていました。

## 江戸の旅人の成田へのアプローチを辿る

江戸後期の旅ブームの火付け役となった東海道を中継とした『成田道中膝栗毛』をもとに、ゼミでは主人公の成田詣のルートと道中での観光活動の研究・追体験(巡検)を試みました。

主人公たちは、日本橋にあったとされる行徳河岸から船に乗り、小名木川を經由して千葉県市川で行徳で下船、その後陸路で中山法華経寺等に立寄った後に船橋(泊)へ。翌朝、船橋の大神宮に参拝の後、木下街道で大和田、臼井、佐倉を通過して新勝寺に向かいます。現在では上野から成田まで京成電鉄の特急で約一時間。江戸時代は2日かけて道中の神社仏閣や茶屋(現在のカフェ)、道中の会話を楽しみながらの超スローツーリズム時代～そこには現在にはない楽しみが彷彿とされました。特に我々が惹かれたものが舟運。墨田区の実証事業で隅田川ではない区内の都市内河川の舟運事業の体験モニターで小名木川を船上から見た時、江戸の旅人が実感したであろう光景が甦りました。

航空機・新幹線網の整備等、移動のスピードアップによる経済効果や観光誘致圏の拡大そのこと自体を否定するものではありませんが、対局にあるスローツーリズムの展開は、忘れてきた「旅の楽しさ」を思い起こさせてくれるのではないのでしょうか？ あらためて成田詣の旅を追体験して感じた次第です。

(坂本祐樹・山根真理子(院ゼミ))



行徳河岸から成田に向かう際に通ったと思われる  
小名木川の船上からの風景。江戸の旅人が見た風  
景とは異なる風景がありました・・・思いは江  
戸の旅人、のんびりとした旅になりました。